

自然保育推進事業 活動報告書



kusunoki

1、団体名 くすの木保育園 (現在 認定こども園 くすの木)

2、今年度の活動概要

①環境構成に関すること (フィールド)

くすの木保育園には園庭がない。そのため、主に子どもの遊び場は地域、街全体である。

地域の自然活用を主なフィールドとして捉え、古川近辺、安佐南区地域の遊び場マップづくりを行った。

また、活動の中で、子どもたちがマップを作成することもあり、自分の暮らしている地域を感じられる取組を行った。

古川、公園、武田山、地域のお店、人たちとの関わり、植物、四季のうつりかわりなどを感じ、体験する保育活動をする中で、地域に開かれた自然保育を行うことを大事にした。

公園 地域の公園では、生えている植物も、植えてある樹木も異なり、それぞれの場のよいところを利用して遊ぶことができるとともに、訪れていらっしゃるお年寄りや、未就園児さんと一緒に関わらせていただき、

遊びを一緒に楽しんだり、知恵を教えていただくなどの自然な関わりができた。また、近年、ゴミを公園内にもポイ捨てる方もいらっしゃる中で、遊び場が、いつも整っている状態ではないことから、掃除をしたり、不具合がある場合には、どうしたらよいか、子どもたちやスタッフと一緒に考えてみる場面も持った。なぜ、ゴミをポイ捨てしてはいけないのかという、モラルも、公共の場所で遊ぶことにより、子どもたちが自然と考えるきっかけになっていたように感じる。また、子どもたちが使うからこそ気づく、遊具の壊れや、

危険な箇所について、公園管理課の方へ連絡を入れるなど保育園から行政への働きかけも、一年を通して何度もさせていただき、対応していただく場面を子どもたちが実際に見るなかで、「暮らし」の主体者として、よりよくみんなが遊べるように、暮らせるような社会の仕組みがあるということも、自然に学べるきっかけになっていたように感じる。子どもたちが、市民の一人として、生活の主体者として生きているこの社会の仕組みを小さな頃から感じられる体験を大事にした。そのためには、やりとりの方法をみせ、実際に直してもらった場面にも遭遇するということは、「いつの間にか直っていた」「いつのまにか新しいものに代わっていた」では味わえない、感覚であり、乳幼児期の体験としては、自然であり、不自然ではない環境づくりの一部とした。

(古川や、水路) 園近隣の川や水路の生き物探検などを計画していたが、平成30年度は、計画日が雨のことが多く、中に入ることは控えた。古川の土手遊びや水路に住む生き物探索などを行い、園内で飼育したり元いた場所に返すなど子どもたちの対話によって活動を変化させながら取り組んだ。特に、西原水路では、えびがおり、小学生が放課後、えび釣りをを行っている姿を、園児もみて、同じようにやってみたい気持ちが高まり、釣り方や、餌の種類などを教えてもらうなど異年齢での関わりを持つこともできた。

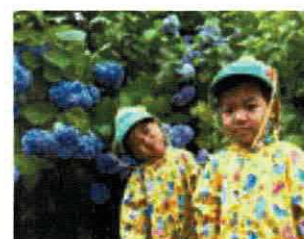
えびは、成長とともに、殻が抜け大きくなることから、変化が面白く、1歳児や2歳児のお部屋でも、生き物観察を一年中楽しむことができた。その他、かわになやざりがになども生息しており、自然の中で、生きている姿、捕まえられそうになると、どんな動きをして、どんなふうにも身を隠すのかなど、ありのままの生き物の姿に触れることもできた。川や水路など、水に関するものは、増えたり減ったりすることから、水が減った時には、かわになの歩いた後なども見え、迷路のようになった歩いたあとを面白がってみる姿もあり、自然、生き物、生体、体のしくみなど、いろいろなことに興味の芽を与える素材がそろっていた。

同時に、水は、状況によって危険な環境でもあり、天候によっての変化や、田畑への水の供給が行われる



日の変化など、自然的、人工的な水量の増減を、毎日の生活の中で目にすることで、なんでも、安全、危険決められるものではなく、場合によって、状況によって、変化するものだという自然の摂理を理解する一助になると感じた。園外での変化する環境との出会い、活動は、ひいては、園内のさまざまな環境にも同等の感覚を子どもたちにもたらすと感じた。ルールを決めて終わり、ではなく、常に変化する状況の中で、自らがその状況、物質との出会いで、どう関わり、どう使うかということで、安全な使い方を知り、距離感を知り、自分と他との関係性を理解していくことに役立っているように感じた。

(雨降り散歩、晴れの散歩、曇りの散歩) 様々な天候の日に、散歩にでかけることで、その日にふさわしい準備物があり、格好があることも子どもたちが知り、どの天候も悪い天候ではないということを活動の中で知っていくことができた。時には、急激な天候の変化もあり、黒い雲が近づいてきた! 「もうすぐ大雨が降りそうだね」、「このくらいならちょっとの雨だから遊べるね」など、天候を予想する様子も幼児園舎では発言も見られ、「雨だから外に行けない」「雨だけどいつでも外に行く」ではなく、雨の状態によって、子どもたちが、遊べるか、お部屋遊びのほうがよいくらいの大雨なのかなど、考えることができるようになってきているように感じた。また、日によって異なる鳥の飛び方や、鳴き方などから推測するなど、生き物と天気との関係も外に出かけることで相関関係がわかるようになる傾向がある。



(野菜育て、植物育て、収穫とクッキング)



西原園舎、東原園舎両園とも、野菜育てや、植物育てに取り組んだ。乳児も幼児も、ホームセンターまで自分たちで育てるものの苗をお買い物に行き、土づくり、苗植え、水やりなどを経験した。野菜では、0、1、2歳児 トマト、きゅうりなど。幼児は、トマト、きゅうり、なす、レタス、いちご、とうもろこし、サツマイモ、にんじん、稲など、様々なものを育てた。育てたものを、洗ってかじる、包丁で切る、ゆでる、焼く、何かと混ぜるなど、それぞれの年齢の発達段階に応じたお部屋で楽しめることを計画し、調理して食べた。この直接的な体験は、子どもたちが五感をフルに使った楽しい体験で、クッキングを子どもたちはとても楽しみに取り組んだ。また、地域の方から畑や田んぼをお借りするというので、祭りなどがある時にご招待をさせてもらう、クッキング

をした日に食べに来ていただくなど交流も生まれた。自分たちの活動が、地域の人、場所とつながっていることを小さな頃から自然に体験できていると感じる。植物育てでは、植物の生長を日々の中で楽しみにし、花が咲くと、食卓に飾ったり、たくさん咲いた時には、お迎え時に、ご家庭にお持ち帰りいただき、日々の生活が少し豊かになる連携を園とご家庭で行い、喜ばれた。草花から発色にも気づき、色水遊びや、植物や野菜から出た汁を使った遊びは、子どもたちが夢中になり楽しんだ。土、泥、砂、水、光など、身近なものをつながりを楽しみ、だんだんと物が変化する仕組みの理解に活きていると感じる。



制作) 散歩で見つけた枝、木の实、草花を使った季節の制作などを定期的に持ち帰ることで、保護者の皆様も喜ばれ、癒しの効果もあるように感じられた。おやすみの日に、家族散歩の時に拾って、同じように作ってみましたなど、園とご家庭の連携や、休みの日に、ご家庭でもできるような活動の提案にもなっているように感じた。保護者様アンケートでは、自然素材を使った、染物、制作、保育園内の環境は、特に好評をいただいております、お仕事帰りに保育園に入ると、「落ち着く」などと言ってくれることもある。

②遊びの事例や、子どもの育ちに関すること

(自然物を活用した玩具づくり、自然を活用した遊び など)

年長のお部屋で、お泊まり保育を子どもたちが計画し、どんなことをしたいか、何を食べたいかなど話し合う中で、「そうめん流しをして食べたい!」と意見が出た。気持ちが高まる中で、どのようにそうめんながしの仕組みを作ろうかと子どもミーティングが開かれた。身近な材料を使って、牛乳パックをつなげてそうめん流しができるか?など話しになったが、なかなかこれだ!というアイデアが浮かばずにいた。

活動ドキュメンテーションの掲示をみられていた保護者の方々が、子どもたちに、竹で作るそうめん流しのアイデアを打ち出し、子どもたちに一緒に作ろうと誘ってくださり、土曜日を使った、竹のそうめん流し装置づくりと、竹の器、お箸づくりが展開された。

竹は、保護者様が田舎から準備してきてくださり、子どもたちは、初めて使う道具、素材の取り扱い方を大人から教わり、また、大人自身も初めての方も多く、子どもと一緒に教わり、お泊まり保育に必要な素材づくりを行った。お泊まり保育にむけて、準備していく事柄とともに気持ちも高まり、また、自分の使うものを自分で作ったという自信にもつながっていった。

大切に保管していたものの、かびが生えるものもあり、自然のものを使うということは、かびが生えることもあるといった、ごく自然のことも体験によって学ぶことができた。

大人と子どもが一緒になって竹、のこぎり、サンドペーパーなどの素材や道具とでつながる心は、大きかったように感じる。

保護者様も、ご家庭ではしないことを、リードして下さる方がいることでやってみることができ、無理のない活動の仕方が行えたと感じる。保護者様が園や子どもたちの活動を理解し、協力して下さった自然活動だった。



③その他、自然体験活動の実施にあたって工夫したこと

(スタッフの資質向上の取組み、地域との関わり、保護者理解に向けた取組みなど)



スタッフの質向上の取組み)

北欧保育研究会への参加。(10日間)自然保育への取組みの経験の長く、質の高い国の取組みを見学させていただいた。また、その後、スタッフ報告会、保護者様との報告会を兼ねたお茶会などを開催し、研究会を園内の保育に活かしていけるよう取組み始めた。

自然保育アドバイザーの菊間先生に来園していただき、スタッフが、日頃子どもたちが遊んでいる場所の樹木の説明や、遊びの提案などをいただいた。(2回)



保護者様に対して) 遊びの楽しさや、活動への心配ごとを園と保護者の皆様とで共有や連携ができるよう、発信するツールや受信するツールを持っている。(お部屋ごとのドキュメント、園全体の様子わかる園だより、フェイスブックや、大園長ブログ、その他、送迎時の対話、連絡ノートなど) また、活動によっては、服装が普段と異なった方がよい場合は事前にお伝えし、持ち物持参の依頼や、身体的な準備の確認を行っている。(服装、持ち物、体調の申し伝え等) 自然体験のほか、自然物を使った装飾等、日頃の日常の家庭生活でも楽しめることを保育園内に散りばめ、保護者の方も、自然物から心地よさを感じられるように心がけている。日頃の園生活において、基礎的な準備(心、体、技能)などを段階的に行い、年齢に応じて、無理をしすぎない活動をプログラムしており、安全とチャレンジの軸をぶらさないようにしている。

特に印象的だった遊びの事例に関すること



安佐南区の山本にある武田山に、毎年年長のお部屋がホップ、ステップ、ジャンプで、段階を踏みながら山にチャレンジしている。平成30年度の年長のお部屋では、それぞれの時期の山登りに自分たちで目標を持ちながら取り組んだ。しかし、目標通りにいかないというのが自然活動の醍醐味。一人ひとりの体力も異なり、気持ちも異なるなかで、ステップの二回目の目標が到達できなかった。

山の中腹にある、「弓場あと」まで行き、弓場で弓を射って遊ぶというのが、子どもたちの立てたその日の目標だったが、疲れを感じる子どもや、他の楽しみをみつけて遊ぶ子どもなど様ざままで、お部屋で一つ立てた目標が達成できなかったという経験をした。園に戻り午後の時間で、子どもたちが行ったのは、「子どもミーティング」。今日の振り返りと次回にむけてのミーティング。大人は同じ部屋にいながらも、子どもたちの話し合いを見守ることに徹底した。

そのミーティングの中で、子どもたちから様々な気持ちや自分の状態を仲間に知らせる言葉が発せられ、自分と他者の違いを理解しようとしたり、チームとしてみんなで頂上まで登りたいという気持ちは、みんな一緒であることを子どもたち自身が分かち合い、作戦会議と銘打って、どうしたらみんなで山頂まで次回行くことができるかなどを出し合った。ステップで果たされなかった自分たちの目標を、次に活かすという活動の中で、子どもたち同士の助け合いや励ましあいが起こり、応援しあえる仲間へと成長しあっていく様子が活動からみられた。園生活の最後に、自分たちの暮らす広島市の街が全貌できる武田山の頂上に登りきるという経験によって、子どもたちが仲間と共に達成したこと、自分たち自身に感動している様子は、山を降りてきた誇らしげな姿に、感じられた。またこの経験は、代々、くすの木の伝統になりつつあり、自分の育った街を愛する気持ちも育まれるといいな、と願っている。いつか大人になった時に、「子どもの頃に友達と一緒に、この山に登ったんだよ」というキヲクは、ふるさとの街を愛するきっかけになるのではと思う。

山や、川、空など、時代を超えて揺るがないものを愛する気持ちは、幼少期の時から直接的な体験を通して育んでいきたいと思っている。しいては、循環していく世界を理解し、地球を大切にするといった大きなスケールで物事を考えていける知性が身についていくのではと感じている。



(3) その他

土曜日を利用した土曜日ワークショップを月1度程度無理なくスタートしている。親子散歩、ハーブを使った虫除けスプレーづくり、味噌づくりなど、親子でできる、私でもできるをキーワードに、育児の楽しみを少し、くすの木エッセンスを添えた楽しい企画を継続していきたいと考えている

昨年度は、保護者の方と、北欧保育研究会後の報告会において、フィーカ（お茶会）を設け、北欧保育のムービーなどを通して、くすの木で、できそうなこと、家庭でもできそうなことなどを保護者様に考えてもらうワークを行った。このような形で少しずつ、園の運営に、保護者様のアイデアを生かしてご協力をいただきながら、楽しい自然保育を展開していきたい。

